

「日本の中国・香港認識が意味するもの」

沢 田 ゆかり

「古い世代のやったことは、若い世代に関係ない」という考え方があります。私も学生時代には、このような考え方に惹かれていました。といいますのも、院生時代にあるフランスの方に「自分と同世代のドイツ人とは同席したくない。しかし若いドイツ人は罪がないのだから、自分は彼らに不愉快な思いをさせることはしない。」というのを聞いた時に、正直言つて羨ましく思つたのです。当時の私の感情は、次のようなものでした。

日中関係も戦後五十年以上たつて、古い傷の上に力

サブタができ、その下に新しい肉が盛り上がっている。それなのに過去の傷をえぐり続けるのは、どれほど生産的なことだろうか。極論になりますが、仮に父祖の罪を永遠に背負い続ける言われれば、若い世代はうんざりしてしまい、かえつて中国への反発を強めるのではないか、と思つていたわけです。

しかし昨年から大学の教壇に立ち、学生たちと実際に日常的に接触してみても、上記の考えの限界を痛感いたしました。若い世代は過去にこだわらず、恩讐の彼方に新しい友好の時代を築くのかと楽天的に考えてい

たのですが、それはやはり幻想だったようです。たとえば小島先生の基調報告に、中国に対する蔑視のお話がありました。私は蔑視と劣等感の両方がこもっていると思うのですが、若い世代の間ではそれが消滅するのではなく、新しい形を取って出現していると感じました。

その背後にあるのは、まず知識の欠落です。次に挙げられるのが、自分の身の回りの尺度を絶対的なものと信じる視野の狭さです。

前者の例を挙げれば、昨年の夏休みのことですが、中国語学科の学生が三週間ほど北京に語学研修に参りました。私はその付き添いとして一緒に行動し、彼ら对中国に対する反応を観察する機会を得ました。そこで、彼らは今の時代の日本しか判断の尺度にできないことに気づきました。トイレがくみ取り式でイヤだ、使いたくない。暖房がお粗末だ、信じられない、というのです。

これが素直な感想であるうちは、別にいいのです。しかし、それを徐々に拡大解釈して「だから中国は遅れている」とか「不潔だ」と結論を一般化し始めると、おかしいことになってきます。我々は国鉄時代の駅のトイレを憶えています。くみ取り式が珍しくなく、清掃面でもどうも満足のいかないことが多かった。ですから、それがいかに短期間で変化しうる現象か、ということも感覚的に分かります。しかし学生には、そういうった時間軸を遡った比較ができない。中国は彼らが最初に経験する途上国です。今の中国と日本を相対化して見るための視座がない。これが若い世代の陥りやすい認識の罫だったのです。

私は大阪の河内長野という田舎町で育ちましたが、小学校の校舎は木造で、トイレはくみ取り式、公衆便所には良くして灰色のごわごわした厚紙が箱に入れて置いてあるだけ、時にはそれが新聞紙でした。また暖房については、石炭ストーブが当たり前で、石炭を運ぶ

のが当番児童の大事な役目でした。二人一組になって重い木箱をかついで石炭置き場に行き、真っ黒になつて石炭を積んで帰るのは、当時はさほど辛いとも思いませんでしたが、楽しい作業でなかつたことは確かです。また春が近づくと煤払い日があり、教室の煙突を掃除するのも児童の仕事でした。それに比べると、神奈川大学の学生さんが抵抗を覚えた中国の大学の暖房は、むしろ近代的です。

縦の比較の視点がないという点については、ご両親からの情報の伝達が限られているということなのかもしれません。新しい知識の伝達だけでなく、自分の世代の経験を語りついでいくのも先達の役割だと思つていますが、核家族化が進み、祖父母との同居が少なくなつた今では、それも難しいでしょう。

しかし横の比較の視点はもてるはずですよ。実際に、中国と日本の状況を比較して、単に「快適」という尺度で測るのではなく、「活力」という角度で捉える学

生もいました。今の日本に閉塞感を感じている学生は、中国の混乱や一種の無秩序というものをも含んだ大陸の熱気に非常に憧れる。でもその内実についての知識はあまりないのです。ですから、自分の惹かれる要素について、客観的に言葉にすることができない。表面的なアナキーな魅力という認識だけにとどまつてしまふ。

つまり、やみ雲に物質面から中国大陸の一部を蔑視したり、自分の理想が日本で実現されないから、中国にそれを映し出して、それによって中国を美化して、心の内なる中国像をつくつていつている。これでは若い世代に関しても「新しい中国認識」といえないではないか、と思つた次第です。

日本の香港認識

私は香港問題を若干勉強しました。上記と似た思い

を抱いたのが、香港返還時のことです。授業を通じて知った学生の「香港返還」への見方は、一言で言えば「かわいそう」というキーワードで表現できるものでした。遅れた中国に吸収されてしまう香港は、かわいそうである。発展途上国の中国よりも、ブランド品も豊富にあつて、高層ビルが建ち並ぶ近代都市である香港にシンパシーを感じるのでしょうか。しかし香港がイギリスの植民地であり、植民地の体制下で香港人には選挙権もなく、民主的な政治制度もずっとなかったこと、返還が決まってから大急ぎで上からの民主化を進めたこと、それによって社会構造が転換したことは、勉強しないと見えにくい。

学生さんの素直な心情を責めるつもりもありませんが、現実の問題として知識のなさが彼ら自身にはねかえってくることを考えると、もう少し近隣諸国の歴史や現状について、きちんと知識を伝達する必要があると感じざるをえない。たとえば五年前までは、日本で

は思うような就職口がないので、香港に行つて就職したい、と言う学生がたまにおりました。香港なら大学で習った中国語を生かすことができるし、日本よりも自由だ、というのです。ちなみに香港に行きたいといった学生のほとんどは、就職率の低い女子でした。彼らは「香港なら男女差別がなく、女性にも大いにチャンスがある」という。

ところが実際に香港に行つて就職したら、国民健康保険も雇用保険も何も適用されない。また普通の企業は住宅手当はまらずない。中国語と日本語に加えて英語がどれだけできるか、あるいはほかに特殊技能があるかどうかで給与の水準が決まってくる。また男女差別ということになれば、賃金が低い仕事ほどはつきりと待遇に格差が出てくる。したがって、よっぽど従業員に福利厚生が整備された大企業をみつけたうえで、次のキャリアに結びつくよう工夫しないと、相当な苦勞を強いられます。そういう現実を認識せずに、一般的

なマスコミ報道で得たイメージだけで自分の将来に関わる判断をしてしまう。まして日中戦争中に香港が日本の占領下にあつたことや、軍政下でさまざまな問題が発生したこと、それらがイギリスと中国の双方に苦い記憶として刻まれているということは、香港で働くという若者の意識に上つていなかったのです。

一九九七年、香港の主権はイギリスから中国に返還されますと、これと前後して歴史教科書の検討がおこなわれました。従来の教科書では、イギリス史と中国大陸の近代以前の歴史が中心で、中国革命に関する記述は詳しくなかった。ところが返還を境にこれまで強調されてこなかった香港史が脚光を浴びるようになりました。植民地時代の教科書は中国の近現代史に弱かった。それはイギリスにとつて支配の正当性に都合の悪い部分が多いからでしょう。返還後には「中国の」香港になるわけですから、むしろ近現代の部分強調する必要があります。このため教育界から、香港史にもつ

と力を注ごう、という方針が出てきます。

その中でもっとも重視されているのが、日中戦争に関する部分です。日本軍がいかに矛盾だらけの政策で香港を占領したか、その結果として香港の住民が被害を受けたか、ということを中心に学校で教える。また同じ中国人が日中戦争中に中国大陸で、どのような戦争被害にあつたかを詳細に教える。そういうふうな学校教育で日本のポジションが決まってくると、香港の若い世代の日本に対する見方というのも当然影響を受けるはずで、日本の若い世代との認識ギャップは、ますます広がっていく。そんな変化を知らず、香港に働きに行つて、とつぜん現地の人々との認識ギャップに直面した時、それを冷静に受け止めることができるとは思えません。過去のしがらみを知らないというだけでは、結局そんなに新しい展望というのは開けないのではないかと思つた次第です。

それでは次に、どうしたらいいのかということ考

えてみましょう。私が思うのは、自分の中にある日本の尺度を問い直すことが必要だ、ということですが、このような方法は遠回りに見えますが、中国に対する認識のずれの根源を質せば、意外に日本を知らないために起きている部分があると思います。冒頭で過去の日本に對する認識不足を指摘しましたが、日本の現状に關しても頭の中に描く日本のイメージと日本の現実が往々にしてくい違ふことがあります。私自身の例になりますけれども、日本製品は技術の面ですぐれているというイメージをもっておりました。また日本の社会制度や経済制度に對する疑念はあつても、途上国よりはレベルが高いという考えがなかなか頭から抜けません。なんといつても、日本は先進国である、したがつて発展途上国に技術を移転することはあつても、逆はありえない、と感覚が無意識のうちに刷り込まれていたのです。

しかし現実はずしもそうではない。たとえばコン

ピュータを例にとつてみますと、日本よりも台湾の方がパソコンアイランドになり、香港やシンガポールの方がIT環境が先に整っている。都市同士ということでは東京と比較しても、これらのアジア諸都市の方が先行していたと言えます。ハードウェアの製造にいたつては、すでに中国の珠江デルタや長江デルタの方に生産基地が移つています。ここ十年の中国製家電の品質向上は驚くほどで、日本のメーカーも国内と同じレベルの機種を同時発売しないと中国市場に入つていけなくなつていきます。これは中国の方が後発性の利益があるということを考えれば、むしろ当然かもしれません。キャッチアップ型の市場化を進めているので、新しいものを吸収するという点では、日本よりも貪欲です。

ところで日本もかつては、キャッチアップ型の工業化を経験した国です。このため日本と中国、そしてアジア諸国の近代化の過程には、類似したところがあります。同じ圧縮された工業化過程を経たことから、そ

の負の結果もよく似ています。例をあげましょう。今アジアでは少子化が進んでいます。核家族がどんどん増えて、それとともに出生率が落ちてきています。家族のメンバー数が縮小すれば、家族の間での扶養の機能も後退します。しかも少子化によって、社会全体の高齢化が同時に深化していく。そのような状況のもとで、お年寄りをどうやって養つたらいいのか。これはアジアで共通する問題になりつつあります。さらに急速に進んだ工業化のために、都市への人口流入が集中豪雨的に発生しています。このような都市の過密によって、住居難が深刻化せざるをえない。

もうひとつアジアで国境を超えて考える必要があるのが、環境問題です。マクロ的な環境問題は、田畑先生がすでにお話になりましたので、ここでは割愛します。私がレジュメに書きましたのは、もう少し身近な問題です。いま日々、台所に立っていけば、中国の食品が日本に住んでいる我々の元にどんどん入ってきて

たということを実感するはずですが。例えば一九八〇年代まで、輸入冷凍野菜といえば、アメリカ産のコーンやグリーンピースが代表的なものでした。グリーンジャイアント印のミックス・ベジタブルをラーメンに入れた記憶のある方もいらつしやると思います。それが今では中華お総菜の冷凍セットや剥きサトイモがたくさん出回っています。安いなど思つて見たら中国産シイタケやんにくだった、ということはしょつちゅうある。それらの安全性をどうやって確保するのか？これは日本の水際で検査して止めればよい、というような複雑な話で片付けられません。生産の現場から日中間で協力する方が望ましい。というのは、これらの対日輸出食品の開発には、日本の企業が関わっているからです。

こうした事柄は、貿易問題にも共通しています。中国産のネギと畳表が日中間の貿易摩擦に要因になり、にんにくをめぐる韓国と中国の間に通商問題を引き

起こしたのは、記憶に新しいことと思います。ちょっと調べてみても、日本のかんぴょう生産がどんどん落ち込んでいまして、今、市場で出回っている輸入かんぴょうの九割が中国産です。

ここでも注意したいのは、日本の農業に後継者が不在になり、その技術者や農家が中国に技術移転した結果、かんぴょうの輸入が増大して、国産のかんぴょうと競合している、という点です。ネギにしても豊表にしても、同じように日本の商社やメーカーによる開発輸入や技術移転の構図が背後にある。つまり、ここには日本の国内の問題が形を変えて中国の農業に反映されているのです。単に中国の輸入に圧倒される日本の農業という図式で片付けるわけにはいけません。むしろ日本と切っても切れない原因があるといえます。

中国をみる縦と横の座標軸

さらにいうと、中国と日本を考える場合に、単に二国間の現状で問題を論じるのではなく、横と縦の座標軸の中でお互いを位置づける必要があるのではないか、と思っています。縦の座標軸とは、さきほど来お話ししました歴史認識です。横の座標軸というのは、世界の中での位置関係です。第三国から見た場合、お互いにどういう位置にあるのかということを意識すれば、最初から結論が見えてしまうようなステレオタイプの議論に風穴を開けられるのではないかと期待しています。

その例として、最近日本の新聞で読んだエピソードをあげたいと思います。あいかわらず山一証券の倒産関連の記事が紙面を賑わしていますが、それに付随する形で近未来である二〇二〇年の日本のある家庭の描写が載っていました。未来フィクションという設定

を通じて現在の世相を切り取ろう、という企画だったのでしよう。その家庭の描写は、次のようなものでした。父親が「年末のお休みには、海外旅行に行きたいね」という。すると母親と祖母が口をそろえて「どこにそんな余裕があるの」「お父さんの手取りはぜんぜん増えないじゃないの」とか「社会保険料はかさむ一方だけど、日本はそもそも子供の数が減ってしまったからどうしようもない」というようなことをいう。

そして問題の最後のシーンです。父親が「もう海外旅行なんて贅沢なんだね、日本人にとっては…」とつぶやいてテレビに目をやると、上海の楊さん一家が映っている。彼らはインタビュアーに答えて、「今年のお正月はハワイかグアムか、南の方で家族と年を越します」と言っている。つまり二〇二〇年には中国の人々の方が日本の一般家庭よりもはるかにいい生活をしている、ということを示唆するのです。

私はこの企画自体の意図が日本の未来に対する憂鬱

を描くことにあつたと理解しておりますし、それ以上の意味があつたとは思いませんが、ここに一種の中国脅威論が埋め込まれていることは明らかです。順調に経済成長しているように見える中国に対し、新しい劣等感を抱く日本人の姿があります。ちまたの「中国脅威論」のせいで、日本人の中国認識には従来の蔑視と贖罪意識に嫉妬と劣等感が混在して、さらに複雑なものに変形しているのです。

ところが実際問題として「中国脅威論」の実態は、中国のごく一面を取り出したものにはすぎない。現実の中国には、解決を迫られる問題が山積しています。また中国の成長を日本の没落とセットにして考える必然性はどこにもない。もつと踏み込んでいうと、中国の経済成長を語るときには、日本との関係以上にアメリカのあり方に注目する必要があると思います。

私はつねづね日中関係は、米中関係の中で規定される部分が大きいと感じています。日中に米を加えて見

たとき、日中ともに最終仕向け地であるアメリカの景気に左右されて貿易が動き、またアメリカの意向を受けて通貨の交換レートが一定の方向性をもつ。それにもまた貿易が付随していくわけです。

この横の座標軸に縦の座標軸を加えると、日米関係の歴史を見ることになりましょう。一九八〇年代、アメリカは日本に対して、まさに「日本脅威論」を主張していました。日本がどんどん対米輸出を伸ばして、黒字を蓄積していた。自動車も電子産業も、本家であるアメリカに追いつき追い越していった、日本が半導体生産でアメリカの産業の根幹を握るようになった、という話が、当時盛んにマスコミに登場しました。そうして発生した貿易摩擦が激化し、日本の国内市場の閉鎖性が攻撃されるようになると、こんどはそれに対して「ノーと言える日本」という反応が出てきたわけです。

ところが一九九〇年代になると、対米輸出の規制が

緩和されたわけでもないのに、バブル崩壊で日本経済が停滞すると、「日本よ、しっかりしろ」という論調がマスコミ報道を支配します。いっぽう中国がアメリカの最大の貿易赤字の対象国になると、今度は「中国脅威論」と「夢の中国市場」の両方がアメリカの論壇をにぎわせる。これに対する中国の反応は、脅威論に対しては「ノーと言える中国」であり、しかし同時にWTO加盟という形で、日本と同じく国内市場の開放に踏み切ったのです。

東大の田中明彦先生の言葉を借りると、アメリカのアジア認識には「アメリカを経済面でしのご可能性のある脅威が育つ場所」という部分があるそうです。けれども軍事力でも経済力でも、はたまた政治力でもアメリカは超大国であって、一体日本や中国のどこが脅威といえるのか。現実の国力の差を考えると、この「アジアに潜む脅威論」は多分にイメージ的なものすぎない。しかし国民の間に広く流布すると、それが世論

を通じて政策に一定の影響力を及ぼすようになる。それがまわりまわって、冒頭で紹介した若者の認識やイメージを形成しているのだと思います。日本で流布する「中国脅威論」も、こうした文脈でとらえなおせば、やみくもに中国の経済成長を警戒する議論の中心が見えるのではないのでしょうか。

最後に一言だけ申し上げたいのは、このような状況下にあつては若者の日中の文化交流が大事な意味をもっているのではないか、という点です。莫先生もレジュメの後半にお書きになっておられますので、私が繰り返す必要がないかと思いますが、日本と中国の間で、中国の主要都市の住民千二百人に対して行った意識調査があります。これは、あなたはどういうルートで日本の情報を得ますかというアンケート調査でした。複数回答が可なので、足し上げても一〇〇%にはなりませんけれども、トップはやはりメディア、すなわちテレビでした。二位が日本製の家電製品や自動車

です。これらの日本製品を通じて、日本のイメージを得る、という回答でした。その次の三位が新聞報道で、四番目がマンガ、アニメです。これに対して、学校教育というのは七番目でした。比率でいうと、アニメなどが七%であるのに対して、学校教育が四%です。

これは、伝播力があるのは従来の製造技術、そして日本で今一番脂ののつた若者文化だということでしょう。そういう意味で、アジアに日本の大衆文化が広がっている。この点で、若者の間には意外な共通の話題が存在しています。私はこの共通項を大事にしたい、と考えています。もともと日本のアニメには「日本」が強く出ているわけではない。日本の自動車や日本の製品に、日本の文化や日本というマークが麗々しく書いてあるわけではなくて、ただの性能のよい製品、おもしろいアニメとしてのみとらえられている。ですから、これを過信して、すぐに政策に利用するという方針が出て意味がないと思います。ただ現代の大衆文化と

いう切り口で見たときに、若者世代には新たな「楽しく面白い日本」というイメージが見つかる、ということとを申し上げたかった。これは政府が進めてきた文化交流とは異なる次元で形成されたアジア共通の文化財だと感じます。それを大事に育てることで、日本のイメージアップと中国を含むアジアからのフィードバック、そしてアメリカやヨーロッパにまで広がる文化交流の芽が育てば、と期待しています。このような点から、私は若者文化の柔軟な普遍性を高く評価するものです。ただ縦の歴史認識と横の座標軸のなかで、相対化しなければ、この事象への客観的評価はできないと思います。以上です。